

No.	患者		1日投与量 投与期間	副作用	
	性・ 年齢	使用理由 (合併症)		経過及び処置	
1	男 40代	ざ瘡 (なし)	不明 不明	自己免疫性肝炎	
				開始日	顔面の尋常性ざ瘡に対して、本剤の投与を開始した。
				発現日	倦怠感が出現したため受診した。AST(GOT) : 779 IU/L, ALT (GPT) : 1384 IU/L, T-Bil : 5.5mg/dLと肝障害を認めた。
				年月日不明	薬剤性肝障害を疑い薬剤を中止したが、T-Bil : 8.9mg/dLに増悪した。肝生検を施行し、国際診断基準でAIH scoreは治療前で13点(疑診)であり免疫異常を伴った薬剤性肝障害との鑑別が問題となり、病理所見及び臨床経過から自己免疫性肝炎と考え、処置としてプレドニゾン60mg/日の投与を開始した。
				年月日不明	肝機能は改善し退院した。DLST検査結果は陽性であった。
併用薬 : なし					

No.	患者		1日投与量 投与期間	副作用	
	性・年齢	使用理由 (合併症)		経過及び処置	
2	男 60代	抗生物質療法 (湿疹)	200mg/日 10日間	紅斑性皮疹	
				投与22日前	野良猫に左前腕をひっかかれた。
				投与4日前	創部悪化のため皮膚科医院を受診し、レボフロキサシン水和物の投与を開始した。
				投与2日前	レボフロキサシン水和物の服薬を終了し、セフカペンピボキシル塩酸塩水和物の投与を開始した。
				投与開始日	セフカペンピボキシル塩酸塩水和物の投与を終了し、本剤200mg/日の投与を開始した。
				投与2日目頃	全身に薬疹(多型滲出性紅斑)を認めた。
				投与5日目	セチリジン塩酸塩、エメダスチンフマル酸の投与を中止した。
				投与6日目	微熱を伴うようになったため、総合病院皮膚科に紹介受診となった。 左前腕には膿疱、びらん、発赤、左腋窩リンパ節腫脹を伴っていた。四肢軀幹に小丘疹、膿疱、紅斑を認めた。
				投与8日目 (発現日)	前腕びらんは消失したが、全身の紅斑は拡大し癒合が認められた。プレドニゾン15mg/日の投与を開始した。
				投与10日目	皮疹はさらに拡大し、水疱形成が認められたため、本剤の投与を中止し、総合病院皮膚科へ入院となった。プレドニゾン30mg/日に増量した。
				中止4日後	皮疹は退色傾向を示したため退院した。
				中止7日後	プレドニゾンを20mg/日に減量した。
中止25日後	薬疹(多型滲出性紅斑)は回復した。プレドニゾンは漸減中止した。				
併用薬：セチリジン塩酸塩，アスコルビン酸・パントテン酸Ca，レボフロキサシン水和物，セフカペンピボキシル塩酸塩水和物，エメダスチンフマル酸塩					